海蝶ノート 7

吉川英梨

# 女性救急救命士の数が増えたらいいな

連載６回目より、2019年３月６日に横浜防災基地で行われた展示訓練の様子をお届けしています。

さて、Ａ水槽での溺水者吊り上げ救助訓練のあと、すぐ隣にあるがらんどうのスペースに案内されました。Ｂ模擬船室と呼ばれる場所です。３階建ての建物以上の高さがあり、天井にぽっかりと四角い穴があいていました。強い日差しが薄暗い空間に差し込んでいます。

なにが始まるのかしら。

目の前には、救急救命講習などの現場でよく見る、胸元がゴムになっているマネキンが横たわっています。

岩男勝実基地長（当時）が、説明をしてくれました。

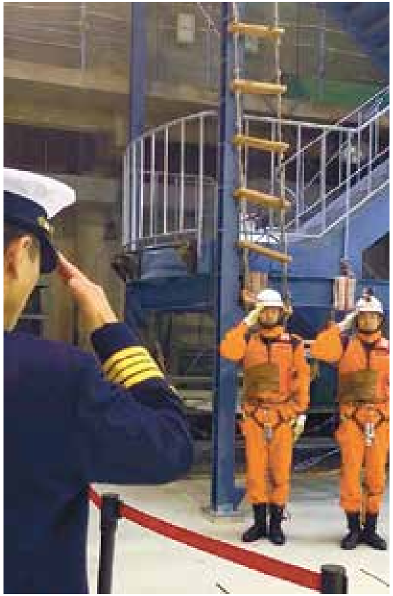
船内構造物内で救急患者が発生した際の、救急救命措置を施しながらの吊り上げ訓練だそうです。

10㍍近く上から「かかれ！」の掛け声が。ひゅるるるぅ～！

という音と共にズドンと目の前に落ちてきたのは、サンドバッグのような「錘」（緑色の降下袋）。続けて、バックパックを背負った隊員２人が、次々とロープをつたい降下してきました。その間、わずか数秒。緑の錘が落ちたときは地面にズドンっと破裂音に似た音が響きましたが、隊員の皆さんは足が地面につく音すらしない。ふわっと舞い降りる。しかも10㍍をたったの数秒で。訓練されているからとはいえ、地面に降下する姿の優雅さにこちらは惚れ惚れしてしまいます。

早速、「聞こえますか！」と救命措置が始まりました。

訓練終了後、敬礼（筆者撮影）



岩男基地長によると、彼らは特殊救難隊の中でも救急救命士の資格を持った隊員とのこと。

あんなに高いところからロープ一本でさあっと舞い降りてくる救急救命士がこの世にいるなんて！　そんな人が天からさあっと救助にやってきたら、急病人にとっては神様にしか見えないことでしょう。

気道確保、AED装着、心マッサージなどの救命措置が目の前で滑らかに行われていきます。

さてどこかで見たことがあるシーン。みなさんお手元の『海蝶』の149㌻をご覧ください（笑）。

主人公の女性潜水士、忍海愛が沈没船内の捜索中にブラックアウトを起こし、船上に引き上げられて救命措置を受ける、まさにそのシーンです。

執筆の際、この展示訓練で撮影した訓練動画を何十回と見直して参考にさせていただきました。

物語内では、その場に女性救急救命士がおらず、仲間の潜水士たちが愛のウエットスーツを切り裂いて救命措置を行います。女性なので、当然、乳房が出てしまうわけで、仲間の潜水士たち（全員男性）が、すさまじく動揺してしまう、という内容になっております。

## 死の淵から覚醒した時、女性の顔があったら安心

現実問題、女性救急救命士の数は消防の中でもまだまだ少数と聞きました。

私も女性ですが、死の淵から覚醒したときに男性ばかりに囲まれていたら、無意識に緊張を強いられます。ひとりでも女性の顔があったら、「助かったぁ」と、真に安心できます。

女性要救助者の存在が想定される現場では、迅速に女性救急救命士が配備されるような体制が整うといいなと思っております。

（つづく）